

戦後国際文化政策についての非公式懇談会記録

国際文化会館関係文書（文芸評論家編）

和田 敦彦

資料について

本稿では、国際文化会館の設立にあたって行われた非公式懇談会の記録について、その概要を述べ、その一部（文芸評論家編）を掲載する。この資料は東京大学アメリカ太平洋地域研究センター図書室の高木八尺文書に含まれるものである。高木文書は、彼の深く関わっていた太平洋問題調査会に関係する文書がこれまで活用されてきたが、それ以外にもまだ充分には活用されていない重要な資料が多く含まれている。

ここで紹介する国際文化会館関係資料も、管見ではこれまで用いた研究はない。国際文化会館は、一九五二年八月に財団法人として設立される。国内で一億円を会館が調達することを条件に、ロックフェラー財団による総額二億四三〇〇万円の助成を受けて実質的な活動を開始する。⁽²⁾ここで掲げた文書は、国際文化会館が活動の準備を進めるなか、文化面で各界に影響のある人々を集め、意見交換をした記録である。

国際文化会館の設立の経緯やその初期については、会の中心人物である松本重治の著述や、国際文化会館の会報、年史か

らその概要をうかがうことができる。⁽³⁾しかしながら、当時の会館の文書、一次資料については、国際文化会館にも現存していないのが現状である。また、『松本重治関係文書目録』中にもこの時期の会館文書は収録されていない。⁽⁴⁾高木八尺は国際文化会館設立の当初から、その重要な役員として松本に協力しており、関係文書がまとまって残されることとなった。

今回とりあげる文書は、先にも述べたように、当時の文化人や文部官僚となされた非公式懇談会の概要をまとめた記録である。ここでは文芸評論家との懇談会記録を掲載したが、それ以外にも以下に見るように、当時の歴史学者や自然科学者まで、幅広い人々を集めてなされている。したがって、占領期直後の様々な文化領域において、国際間の文化交流に対してどのような考えが抱かれていたかがうかがえる。また、米ソ間の対立を背景とした対日文化政策の中で、そうした力関係からどのような距離感を人々がとっていたのかをとらえていくこともできよう。⁽⁵⁾むしろ、今回とりあげた部分でも見られるが、KBS（国際文化振興会）との関係を含め、松本や会館の考え方、方向性を見当するうえでも貴重である。国

際間の情報の流通やその基盤が形作られるうえで、これらを含む国際文化会館関係文書は重要な資料といえるだろう。

なお、国際文化会館関係文書や会館の果たした役割については、高本文書のその他の文書類とともに別稿にて詳しく論じることとしたい。⁶⁾

国際文化会館非公式懇談会開催概要

第一回 経済学者 一九五二年十一月

中山伊知郎（一橋大学長）、東畑精一、笠信太郎（朝日新聞論説主幹）、松方義三郎（共同通信社専務理事）、佐島敬愛、松本重治（国際文化会館）、ゴードン・ボールス（同）

第二回 政治学者 一九五二年十一月二十六日

蠟山政道、堀豊彦（東大教授）、岡義武（同）、河原次吉郎（中大教授）、丸山真男（東大教授）、辻清明（同）、島田久吉（慶大教授）、松本重治（国際文化会館）、ゴードン・ボールス（同）、大形孝平（同）

第三回 社会学者 一九五二年十二月十日

尾高邦雄（東大教授）、有賀喜左エ門（教大教授）、岡正雄（都大教授）、磯村英一（都庁政民室長）、松本重治（国際文化会館）、ゴードン・ボールス（同）、上田康一（同）、大形孝平（同）

第四回 学術会議 一九五二年十二月九日

本田弘人（日本学術会議事務総長）、石沢貞義（同事務次長）、竹下俊雄（同事務局学術部長）、渡辺正（同事務局学術課長）、吉田正男（同

事務局調査課長）、松本重治（国際文化会館）、平野真三（同）、上田康一（同）、副島種義（同）

第五回 文部省局長クラス 一九五二年十二月十七日

稲田清助（大学学術局長）、岡野澄（同学術課長）、荒木直（同視学官）、寺中作雄（社会教育局長）、小和田武記（社会教育官）、田中義男（初等、中等教育局長）、松本重治（国際文化会館）、大形孝平（同）

第六回 中国研究家 一九五三年一月七日

仁井田陞（東洋文化研究所）、飯塚浩二（同）、福島正夫（同）、平野義太郎（中国研究所）、伊藤武雄（同）、松本重治（国際文化会館）、ゴードン・ボールス（同）、大形孝平（同）

第七回 ギルバトリック氏を囲む 一九五三年一月十三日

ギルバトリック教授（ロックフェラー財団）、辻直四郎（東大文学部長）、中村元（東大教授）、坂本徳松（印度洋問題研究協会）、松方義三郎（共同通信専務理事）、松本重治（国際文化会館）、高木八尺（同）

第七回 自然科学者（理学部関係） 一九五三年一月七日

水島三二郎（東大教授、化学）、坪井忠二（同、地球物理）、萩原雄祐（同、天文）、岡田要（同、動物）、伊藤貞市（同、地質）、弥永昌吉（同、数学）、松本重治（国際文化会館）、大形孝平（同）

第八回 歴史家 一九五三年一月二八日

西岡虎之助（東大教授）、村川堅太郎（同）、山本達郎（同）、松田智雄（立教大学教授）、清水博（同）、江口朴郎（東大助教授）、中屋健一

(同)、松本重治(国際文化会館)、大形孝平(同)

第九回 文部省 一九五三年二月四日

佐藤得一、春山順之助(大学学術局、大学課長)、中西勝治(同研究助成課長)、内藤誉三郎(同庶務課長)、大西一正(同学術情報室長)、近藤春文(社会教育局社会教育施設課長)、柴田小三郎(調査局、国際文化課長)、太田周夫(初頭中等教育局中等教育課長)、釘本久春(日本ユネスコ国内委員会事務局次長)、小倉好雄(同企画課長) 同、松本重治(国際文化会館専務理事)、大形孝平(同)

第十回 印度研究家 一九五三年二月十一日

都留重人(一橋大学教授)、蠟山芳郎(共同通信社東亜部次長)、山口辰六郎(太平洋問題調査会)、松本重治(国際文化会館専務理事)、大形孝平(同)

第十一回 新聞社学芸部部長 一九五三年二月二十五日

狩野近雄(毎日新聞社学芸部長)、平山信義(読売新聞社文化部員)、池田太郎(東京新聞社文化部員)、伊藤忠雄(時事通信社政治部長) 殿本圭一(共同通信社特信文化部長)、斉藤正躬(同社会部次長)、松本重治(国際文化会館)、上田康一(同)、向井啓雄(同)、大形孝平(同)

第十二回 法律学者 一九五三年三月四日

宮沢俊義(東大教授)、横田喜三郎(同)、鈴木竹雄(同)、兼子一(同)、嶋飼信成(同)、松本重治(国際文化会館)、大形孝平(同)

第十三回 ユネスコ 一九五三年三月十一日

前田多門(日本国内委員会会長)、鈴木九万(国内委員会事務総長)、勝本清一郎(日本ユネスコ協会連盟理事)、尾高朝雄(日本国内委員会委員)、松本重治(国際文化会館専務理事)、上田康一(同)、大形孝平(同)

第十四回 文学評論家 一九五三年四月八日

豊島与志雄、勝本清一郎、川端康成、河上徹太郎、吉田健一、谷川徹三、中村光夫、青野季吉、松本重治(国際文化会館専務理事)、向井啓雄(同)、大形孝平(同)

第十五回 エカツフエ事務局長ロカナサン氏を囲む 一九五三年四月十七日

ロカナサン(国連アジア極東経済委員会事務局長)、大来佐武郎(同事務局員)、大内兵衛(法政大学学長)、佐島敬愛(日本経済調査会)、松本重治(国際文化会館専務理事)、大形孝平(同)

第十六回 新聞社学芸部第一線記者 一九五三年五月八日

奥田教久(朝日新聞者学芸部、社会部)、安西均(同学芸部)、鈴木利人(毎日新聞社学芸部)、平山信義(読売新聞社文化部)、頼尊清隆(東京新聞社文化部)、長岡光郎(日本読書新聞編集部)、高橋潭(共同通信社特信文化部)、松本重治(国際文化会館専務理事)、ゴールドン・ボールス(同常務理事)、向井啓雄(同)、大形孝平(同)

第十七回 外国文学者 一九五三年五月二十日

井上満(ロシア文学)、西村孝次(英米文学)、高橋健二(ドイツ文学)、小栗孝則(同)、倉石武四郎(中国文学)、寺田透(フランス文学)、

佐藤朔(同)、松本重治(国際文化会館専務理事)、佐藤得二(同) 向井啓雄(同)、大形孝平(同)

文学評論家との非公式懇談会

日時 一九五三年四月八日 午後六時—九時

場所 ホテル・トウキョウ シルバー・ルーム

出席者

豊島与志雄、勝本清一郎、川端康成、河上徹太郎、吉田健一、谷川徹三、中村光夫、青野季吉、松本重治(国際文化会館専務理事)、向井啓雄(国際文化会館)、大形孝平(同)

松本

知的交流で国際理解を増進するための企画本部をつくりたいという話から、外国から日本に来る知識人、文化人の宿泊設備やライブラリーも付置したいということになって、只今準備中です。この八月までに日本側で一億一千万円集まればロツクフェラー財団から二億四千万円が来て、合計三億五千万円の約半分少し以下を建物に、残りの半分为五年間の事業費と予備費というのがアウトラインです。財団の方では会館が建つまでも準備の費用は出そうということになったが、準備の費用を出すのにも法人でなければ困るということで昨年秋季に法人をこしらえた。これは準備費を受け取るためのものであるが、理事者の顔ぶれも自然と金集めに一つの重点がおかれているが、漸次顔ぶれも変化してゆき得る仕組になっている。一年の経費は約一千万円であるが、これは知的協力、文化交流のための企画費である。外国から人が来て、日本の学者や文化人に会って貰

う場合の準備として、そういう人々のフーズ・フリーを作成したり、関係学術文化団体の調査もしたいと考えている。某の湯、生け花の紹介もわるくはないが、会館としては、なるべく基礎的な仕事をしたいと考えている。

河上 KBSとの関係はどうか。

松本

KBSは日本文化の国際的振興を目標としているが、会館は特別に宣伝的なことはしないつもりです。であるからまた外国の宣伝も受け入れない。勿論KBSと共通な仕事もあると思うが、気持の上で根本的に違つたものである。

河上

将来KBSと仕事の縄張りの上で問題が起らないか。

松本

会館は縄張りの考えをもつていないから、万一問題が起るようなことがあれば、その仕事は全部KBSにあげてしまふつもりだ。

吉田

昔KBSに働いた者として、あの轍は踏まない方がよいといいたい。あれは日本文化を世界に押し売りするものだ。また日本の文学作品を取り上げてわれわれに翻訳させたが、あの程度のものであいう訳し方では、全然意味がないと思う。

松本

日本の文学を翻訳すること自体は大きな意味がある仕事だと思ふが、それには外国人を日本文学の翻訳者として育てる外に道がないような期がする。過日エリセエフ氏に会つていろいろ話をしたが、彼くらい日本語が上手であつても独力で無理だと思ふ。あのような人に日本人が力を貸せば出来ると思ふ。

吉田

日本研究のために来る外国人の数が多くなつたから、会館で、そういう外国人を泊めてあげれば充分有意義だと思ふ。

松本

会館はフルブライト・プロフェッサーの研究会を援助している。研究会に部屋を借したり、講師を斡旋したりしている。知的交流委員会の事業で、日本に来た外国の人には四十日から五十日、日本に

滞在して、毎晩、その道の人と会合して貰うことにしている。先日帰国したダーシーさんもコールさんも非常に喜んでた。

川端 その世話を松本さん一人でやつていいのか。

松本 高木先生をお助けして一緒にしている。来た人が日本全国を廻るのだから、予め通信で連絡したりなかなか大変な仕事だ。一番困るのは、いろいろ苦心して折角引き合わせても、日本の人の方で余り質問もしないし、来た人の質問にもまともに答えてくれないような場合だ。いつもいのであるが、われわれは同窓会の幹事みたいなものだから、学者や文化人が積極的に協力してくれなければ仕事にならない。

谷川 しつくりゆかないのは、言葉の不自由が大きな原因でしょう。

吉田 それ程えらくない人で、もつと若い人で、イギリスのスカラシップでブラツカーなどが来ているが、あの人などは、文化交流のはしわたしの一と役を買える人だと思うが。

松本 あの人はい。ああいう人を育てればよい翻訳が出来ると思う。話は別だが、クノツフ出版社の編集長とかいうシトラウスというのはどんな人ですか。ニューヨークに帰ってから、ジャパン・ソサイエティーに行つて、日本の現代文学の翻訳を出したいのだが、よい翻訳者を得るのが困難な問題で、先ず、試みに最初の一章を翻訳させて試験する必要がある。それには費用がというような話をしたので、ジャパン・ソサイエティーから会館宛に手紙が来ているのですが？

豊島 シュトラウスのやつた日本作家の選択などでもいい加減なものだ。

松本 言葉の障害を何かの方法で越えたいものだが、ブラツカーのような人を育てるのが一番の早道だというふうにだんだん思えるようになってきた。

吉田 日本に来て、日本を紹介しようとする位の人は日本語でやつてゐる。そこまできかなければだめだと思う。

ウエーレーの源氏がそうだ。間違ひは沢山あるかもしれないが。何もブラツカーが特例なのではない。現にロンドン大学から一人きていたが、今は国に帰つた。

松本 イギリスには日本の専門家が十二人いるそうだが、大学教授の席は六しかないとのことだ。先日エリセエフ氏の意見を聞いてみたが、彼は、日本に関する外国語の書物を全部集めておいたらどうかといつてた。会館の図書館は雑誌で特色を出したいと思つてゐる。

河上 アメリカのものは限らないでしょう。

松本 勿論アメリカのものは限りません。ロツクフェラー自身理事にフランス人を入れたらどうかとまでいつている位なので、会館の事業は決して、日米間に限るものではありません。ただ適当なフランス人がまだ見当たらない。

谷川 外国の新聞はどの位購読するか。

松本 図書、新聞、雑誌を合せて年五千ドルの予算だ。会館の仕事は自分達の仕事と考えて協力してくれる日本の知識人が二、三百人出来ればよいと思つてゐる。僕はペンクラブがロツクフェラーに提出した青写真というのを知らないのですが。

青野 ロツクフェラーに出したのではなくて、もう出来上つて、もつていたのを見せたのです。

吉田 ブルースという人（タトルの事務員）は日本語のとてもよく出来る人でいろいろの翻訳をした人だ。

中村 翻訳をする場合に原作者と翻訳者を会わせたらどうか。フランス文学を翻訳する時に原著者と翻訳者が一緒に長く暮してから翻訳する場合もあった。

勝本 外国人に翻訳して貰う場合に、翻訳し易いように原著者がパラフ

レーズしたらどうだろう。以前横光氏がそれをしたことがあった。

中村 そんな場合に日本の作者は無料ではやらないだろう。西洋人は文字通りに忠実な翻訳などをしうとは考えていない。

松本 内村鑑三のホイットマンの訳は「精神訳」と称してむずかしいところとはばしている。

谷川 日本人は馬鹿正直にやり過ぎて反つて面白くないものにしてしま

勝本 西洋人が日本の作品を読んで、そのイメージを外国語で書くのが

翻訳だと思ふ。ただ語学の問題ではない。日本的なものを外国人が自分の筆で出そうとしていれば外国人にとつては、それでよいのではないか。日本の作品を西洋にもつていくと、長編として短過ぎ、短編としては長すぎることになる。

谷川 以前、堀内氏とボノール氏とが二人で漱石を訳してつき合わせて翻訳したことがある。

勝本 翻訳をしてくれる外国人に、日本人が充分説明してあげて、書くことを葉外人にまかせるのがよいかも知れない。

松本 小説は別として、評論はどうですか。

中村 評論は一寸見込みがないかもしれぬ。小林秀雄の「モツアルト」はどうだろう。

河上 中村君の「異邦人」論争の方が外国人にはわかると思う。ジードに「貞奴」という論文があれば面白い。

松本 ダーシーの場合は一寸当てはまらないけれど、大ていの外国人なら、日本の人は対等で通ると思うが、どうも言葉の問題が困る。

中村 言語の障壁は吉田君のような人が通訳することによつて解決しませんか。

松本 この次の知識人交流計画では、ノーマン・カズンが来る。

谷川 あれはたいした者じやないような気がする。来年の秋にユネスコで、ハーバート・リードが来ます。

松本 知的交流は一昨年ロツクフェラーが日本に来て、アメリカに帰る前に、われわれは、イギリスからはブランデンなどが来るが、アメリカから来るのは官吏や軍人ばかりで、日本のインテリに尊敬されるようなアメリカの知識人をよこしてはどうかということを話し合つた。そうしたらロツクフェラーはアメリカに帰つてからコロンビアに十萬ドルを寄付した。その時アメリカの一流知識人として四十名のリストを送つて来た。これはフオークナーとかヘミグウェイは載つていない。つまり来てくれそうな人々を四十名リストに書いて来たのだ。カズンもそのなかに入つていた。アメリカのリストは大体年齢の若い人を推せんして来ている。

吉田 アメリカに限らなければ、まだよい人がある。

松本 今の知的交流委員会の事業は十萬ドルで、それが済んだら、次には国際文化会館で毎年、最上級の人を一人か二人来て貰いたいと考えている。

中村 デュアメルの人に感じたことは、余程日本人側でものを知つていないとだめだということだ。デュアメルの方で日本のインテリが、どの位ものを知っているかの見当がついていない。

松本 外国からよい人が来てお会いしたいといった時にはどうか会つてあげて下さるようお願いします。

中村 そんな場合、みんなを呼び集めるときに、急に通知を出されては無理だ。一ヶ月前位から印刷物でも出しておいた方がよい。

以上

注

- (1) 山岡道男『太平洋問題調査会研究』（龍溪書舎、一九九七・七）、片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三・一〇）等。
- (2) 加藤幹雄編『国際文化会館50年の歩み』（国際文化会館、二〇〇三・四）
- (3) 松本の回想録では『聞書・わが心の自叙伝』（講談社、一九九二）や『国際日本の将来を考えて』（朝日新聞社、一九八八）等でふれられているほか、会館の初期については年刊の『国際文化会館の歩み』（一九五六・一〇）や『国際文化会館一〇年の歩み』（国際文化会館、一九六三）のほか、同館による『Summary Report of the initial five years of the International House of Japan, Inc.』（一九五七）に手紙や報告書の翻刻がある。
- (4) 近代日本史料研究会『松本重治関係文書目録』（近代日本史料研究会、二〇〇七・一〇）
- (5) こうした観点からの対日文化政策へのアプローチとしては藤田文子『日米知的交流計画』と一九五〇年代日米関係（『東京大学アメリカン・スタディーズ』第五号、二〇〇〇）や、松田武『戦後日本におけるアメリカのソフトパワー』（岩波書店、二〇〇八・一〇）等がある。
- (6) 拙著『越境する書物』（新曜社、近刊）